



第47回「おかねの作文」コンクール

母の生きたお金

岐阜県・大垣市立西部中学校 3年 松永 海杜

僕の母はパートで働いています。母は僕が3歳になって保育園に入園した12年前から、今の会社で働き始めました。現代社会は共働きの家庭が多いので、母が専業主婦で父の稼ぎだけで家計を支えている家庭は少ないと思いますが、僕の家はそうではありません。僕は母子家庭だからです。母がパートとして時給で稼いだお金で兄と僕を育ててくれているからです。

母はいつも、
「母子家庭だからといって子供にふびんな思いは絶対させたくない。他の子たちと同じように塾にも通わせたいし、大学も行かせたい。そのために働いているんだから、お金はどれだけかかっても惜しくないし、^{がんば}頑張れる。」

と、言っています。この言葉を聞くと、頑張ろうという気持ちでいっぱいになります。一生懸命働いてくれて通わせてもらった塾なので、僕は塾での授業にも力が入ります。

今年、僕は高校受験です。お金のかかる私立ではなく公立高校を目指しています。その先の国公立大学受験も考えてレベルの高い進学校が志望校です。兄は兄で医師になるために、お金のかかる私立の医学部ではなく国立の医学部を目指して頑張っています。僕たち兄弟は、母が一生懸命働いて得たお金のありがたみをよく分かっているからです。

ありがたみは分かっているけれど実際に働いてお金を稼ぐことが大変だと知ったのは、中2の夏に職場体験に行った時でした。最終的にホームセンターに行けましたが、第1希望、第2希望で行きたかった職場は希望者が殺到し、ジャンケンで負けてしまい、なかなか体験先も決まりませんでした。そのうち希望もなくなり、「もうどこでもいいから早く決めなきゃ」という^{じぼうじき}自暴自棄になってきました。これが実社会へ出る時の本当の就活だったら……と考えるとゾッとしました。自分の夢だった就職先に採用してもらえないことで自信を無くし、

引きこもりや、職を転々とするフリーターになってしまう人が大勢いるのも分かる気がしました。

やっと決まった体験先のホームセンターでは、陳列棚を整理したり、その日に納品されてきた商品を、売り場を駆け回って同じ物が置いてある場所を探して並べたり、ケースを積んだり肉体労働がほとんどでした。朝 10 時から 3 時までの 1 日だけの体験だったので楽しかったですが、これが毎日の作業となるとお金を稼ぐためでも大変だと思いました。このホームセンターには母と同じぐらいの人が働いていました。母もこの人達と同じように、毎日働いてお金を稼いでいると思うと今まで以上にありがたく感じました。この日をきっかけに僕はお金のありがたさ・尊さと、稼ぐことの苦勞の両方を学びました。

僕の家では毎月お小遣いをもらえる制度はありません。テストで 100 点を取った時に 500 円をもらえるのと、小テストでは 100 点を 5 回取ると 100 円をもらえることになっています。中間・期末・実力テストで 100 点を取るの難しく、なかなかもらえませんが、中間テストの理科で 100 点が取れたのでついに 500 円をもらえました。でもせっかくもらったのに、頑張ったご褒美のこの 500 円は無駄遣いできなくて僕は今も大事にしまっています。

僕も大学を卒業したら、社会に出て働いてお金を稼ぐ日がきます。母が「今、兄と僕の将来につながる大切な時期に使うお金は、生きたお金の使い方。決して無駄なお金じゃない。」

と言ってくれているような生きたお金の使い方が出来る大人になりたいです。僕にとっての大事な 500 円と母が毎日稼ぐお金の尊さは同じだと思うけど、母は使うことで大切にしているからです。僕も 1 ヶ月自分で働いて稼いだお金を無駄遣いせず計画的に使っていこうと思います。そして、初めてもらうお給料で、まず最初にしたいことがあります。母にプレゼントをかうことです。

これが僕の生きたお金の使い方、第一歩。そう決めています。

